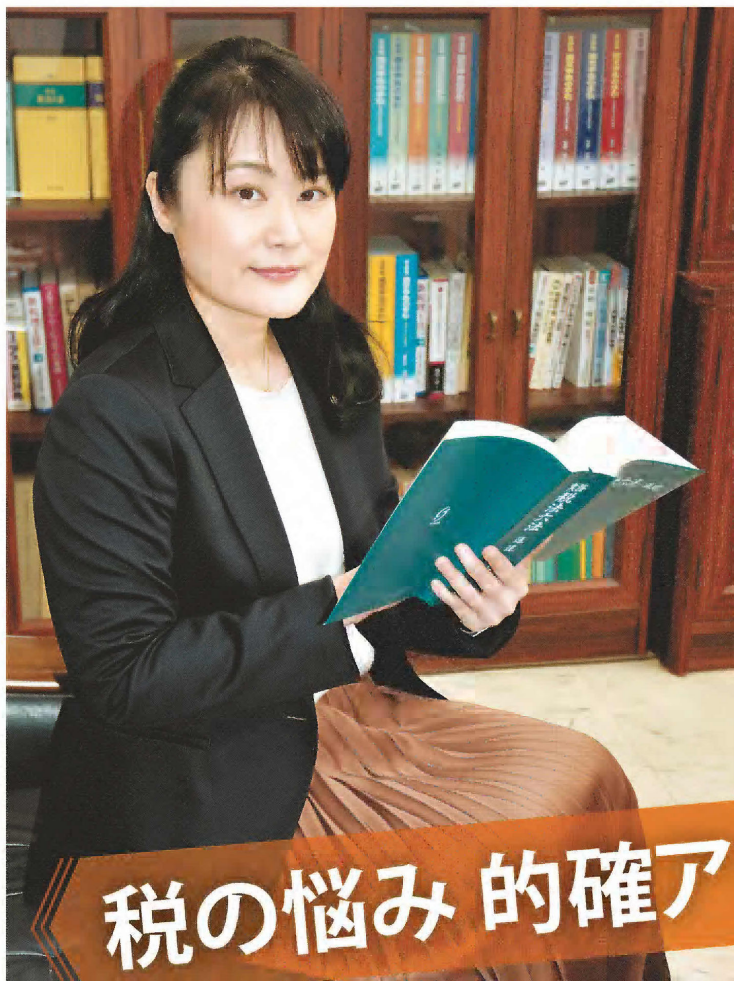


シゴトビト

税理士

富樫薫子税理士事務所

とがし かおる こ
富樫薫子さん(44歳)

苦境の店支援も

消費税、たばこ税、住民税……。世の中には約50種類もの税金がある。どの税金を、どんな場合にいくら納めるかは法令に定められているが、その仕組みは複雑。会社や個人から寄せられるさまざまな税の悩みを解決するのが、税理士の仕事だ。

富樫さんの事務所は約90の会社や法人と顧問契約を結び、税に関する助言を行っている。会社は定期的に、収入からかかった経費を引き、もうけの金額を確定させて「決算書」をつくる。もうけに応じて、納める法人税などの金額も決まってくる。

日々の仕事で多いのは、決算書や税務署に申告する書類などを作り、チェックすること。富樫さんは「税金やお金の計算が苦手な人は多い。正しい額の税金を納められるようアドバイスします」と話す。

家族が亡くなり、家や土地などを相続する人から相談を受けることも多い。納めるべき相続税の金額などのほか、遺族同士でどのように遺産

を分け合うべきか助言するケースもあるそうだ。

最近は新型コロナウイルスの影響で、経営が厳しくなった飲食店や小売店からの相談も増えている。納税を猶予する制度、資金を無利子で借りられる制度……。さまざまな支援制度を紹介し、経営者を支える。富樫さんは「税理士の経験や知識が困っている人の役に立ち、感謝されると大きなやりがいを感じます」と話す。

富樫さんの1日

- 9:00 出勤、メールチェック
- 10:30 企業の決算書や確定申告書の作成
- 12:00 昼食
- 13:00 会社設立の相談への対応
- 14:00 顧客の企業を訪問し、決算内容の打ち合わせ
- 17:00 事務所内でミーティング
- 18:00 帰宅

税の悩み 的確アドバイス

撮影・石井一秋

●関わる人たち



税理士になるには

一般的には、国家試験の税理士試験に合格した上で、2年間の実務経験を積み、税理士として仕事を始める。税理士試験は、会計と税の法律に関する計5科目で構成され、国家試験の中でも難関として知られる。

知識

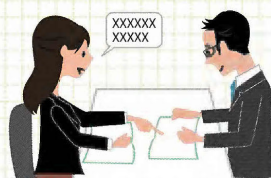
税金には数多くの種類があり、それぞれの制度は毎年変更される。研修会に参加するなどして最新の知識を身につける努力が欠かせない。

信頼

税理士は、相談者の収入や財産などのプライベートな情報を扱う。情報が外部に漏れないよう厳しく管理し、信頼してもらえなければ仕事はできない。

対話力

相談者が何を求めているかをくみ取り、的確な助言をすることが重要。そのためには相談者の話をよく聞き、自分の考えをわかりやすく伝える力が必要だ。



マストアイテム



学生時代からの「相棒」

税額の計算などに欠かせないのが電卓。機種によって数字などのボタンの位置に細かい違いがあるという。富樫さんは、税理士試験の勉強を始めた大学生のときから、使い慣れたこの電卓を約25年間も愛用しているそうだ。

私の失敗談

説明不十分 力添えできず

駆け出しの税理士だった約15年前。顧問契約を結ぶ会社が税務署の調査を受け、急きょ経営者と一緒に立ち会うことになった。調査担当者から決算書の内容についていろいろな指摘を受けたが、税理士として十分な説明ができず、経営者の力になれなかった。そのときの反省から、常に万全の備えで仕事に臨む姿勢を忘れないようにしている。

MESSAGE



- 1975年 東京都文京区で生まれる
- 1994年 豊島岡女子学園高等学校卒業
- 1998年 早稲田大学商学部卒業
- 2000年 早稲田大学大学院商学研究科修士
東京都内のコンサルティング会社に入社。税理士試験合格
- 2004年 税理士登録
父の税理士事務所に入所
- 2008年 個人事務所を開業

お金以外の相談にも 親身に

富樫さんの父も税理士で、中高生の頃は自宅と事務所が同じ建物だった。家族で晩ご飯を食べているときも、悩みを抱えた経営者らから事務所に電話がかかってきた。食事の手を止めて誠実に対応する父を尊敬し、同じ道を選んだという。

税理士になってわかったのは、税金や会計以外にもさまざまな相談を受ける仕事だということ。目標とする父のように、相手の悩みに親身に寄り添おうと心がけている。「税理士は困っている人の力になりたいというサービス精神が豊かな人に向いている仕事だと思います」と話してくれた。